〈書　評〉

三上一夫著
福井県の教育史

舟沢茂樹

本書は都道府県教育史シリーズ全四七冊の第九回配本としてこの五月に発刊された。今日、わが国の教育のあり方はその是非をめぐり厳しく問われているが、本シリーズは将来の教育のあるべき姿を歴史のなかに学ぶべく企画されたものである。福井県を担当した著者（現福井工業大学助教授）は、日本史の研究者であるとともにかつて福井県教育研究所長として『福井県教育百年史』の編さんに関与された方でもある。まさに人を得ており、その期待どうりすぐれた成果となっている。

本書は、「古代・中世の教育」・「近世の教育」・「幕末・維新期の教育」・「近代の教育」の四章からなり、各章の第一節ではそれぞれの時代の教育環境が概観されている。古代では日本海を介した大陸文化との交流、中世では宗教と教育のかかわり（道元・蓮如）、近世では藩校の成立と展開、幕末・維新期では福井・大野両藩の洋学の導入などに力点がおかれている。叙述は、政治・経済の流れのなかに教育を的確に位置づけ、文化一般にも周到な目配りがなされていて説得力に富んでいる。

本県の教育史には他県に比し遜色のない幾つかの特色がみられるが、ここでは一例として医学教育について考えてみよう。戦国期朝倉氏時代の天文五年（一五三六）一乗谷において医書『八十一難経』が開板され、江戸中期の安永三年（一七七四）には小浜藩医杉田玄白らによつて本邦最初の翻訳書『解体新書』が上梓された。また、幕末には積極的に洋学が導入され、ことに福井藩では長崎を拠点に近代医学の摂取に努めている。これらの医学教育の系譜についても本書の随所で紹介されており、先人の業績が顕彰されている。

著者は執筆にあたり先学の研究成果を博捜してその吸収をはかっているが、それは巻末の三百点を越す参考文献によく示されている。関係年表も視野が広く、教育史に対する柔軟

な姿勢がうかがえる。本書を単に教育史にとどまらず福井県の文化史として江湖に推奨する所以である。

（思文閣　B6版三〇二頁　一、八〇〇円）